内外新報 弐

イ 初 15 2

18
152

内外新報第十一號

慶應四年閏四月三日

○

一 栗橋関所中間より古河の兵固め川中へ板を
宿軍方お固め
一 行徳門上筋舟場より忍の勢固め
一 日光門筋三里の宿板引はづし栗橋門より板を
いよし
一 栗橋宿ゆく宿烟上げいたり市中のうろ〳〵後を去りは板
宿軍方より中越に出

一四月十六日小山宿ゟ宮ゟ戦争有之　官軍石橋宿まで
引退いたす
一同十七日小山宿ゟ栃木ゟ戦争有之木沢と申
所の之坊人家やき
○
十九日夜戦後高の原宿荒井と申宿ゟ浪徒の兵隊凡ゟ
七八百人ほど忠陳丈ケ松本ゟ出張と申ハ有之ゟ出張ゟ
高の先き年貢宿ゟ松本の之二百人計出張板木宿ゟ上田
の之二百人ばかり上田の先ゟ尾形ゟ人数之百人計又
文十郎徒の先茅山藤より新関二ケ所ゟ建いたし

○四月廿四日宇津宮人の来状写
十九日宇都宮大合戦有之市中八分通り焼たり人
廿日新田ゟ藩城脱走方ゟ人計り城へ入り日の
丸の旗ゟ　東照神君の旗数十本おし立ル合戦
ゟ此度ハ脱走方勝利迄ゟ百人計り生ゟ捕合ゟ来
りいたし
廿一日壬生石橋宿ゟ小山ゟ安塚の原と申所ゟ合
戦ハ始り
廿二日新壬生藩城焼焔玉業者打立て出き古河の方へ
引ゟいたし

廿二日冥宮会戦暁壱方勝利人数数多人有くい式一条
おまろう居りおかり不十生劣ひ破仆のごとくとゆ
よ四度は

近藤　勇

○平尾壱里塚発れと冥

右い元来深沢のものあく初め立京彩撰組と称を節
め後江戸より使居はあしし大久保大和と変名し平松美
よ小倉の国流山よりおめく　官軍よりの向ひはあし武
い徳川の内命を受けあぐく偽りとあく不容易企よ
出よびは陸よい　終故下を徳川の命を偽りは次

才を罷教るよいとまりびく死刑よおくあひ
梟首せしむる者あり
但し前後い洗ひいとあく京都ちきし上せいよし
廿五日巳ごろのことありと大人の出しまきぬ

○大政官日徳の御冥

紀伊中納言
有馬中将太輔
奥平大膳大夫
小笠原壱岐代丸
藩に城く進

大熱督不日之　長府入城よりもつてお成付くい関東法取
締者奥羽者連ゟ平定之至り申ゟ　指揮つ者くいよ
付ゟ出發来向社　仰付い事
但し長府ゟ之直板　大熱督ゟ下屋敷ゟ滞陳中い勿
論途中者熱ゟ叢書之以為し不見人惜て連ゟ
ん於い事
右一紙

今報遅ゟ　所親伝　所出輩社拒法軍　御覽ゟ上実来
附機之ゟ直板　輩衆之を来法取ゟ社為向　思召之

以右之先報ゟ有ゟ　官軍を抗し見ゟ撃破
之かよぶ之いへども未ぐ解業彼見屯之為し形い於
も和守へいよ付倫之為民狼狽辛苦ゟ行ど社　欲思召
い条　大熱督指揮ゟ之い連ゟ忠戦を遂ゟ四海平定
北安　宸襟い板　所沙汰い事

三月

○

右当時連来ゟ人数者別紙雛形ゟ通り御調へ遣月廿六
日之ゟ出い迄も以来増減ある者い毎ゟ芸お遣

てこれ屋いり

三月廿四日　　軍防局

別紙

一　兵人数何百人　　兵隊

内何百人　　何方出兵

何百人　　何方警衛

残而何百人当附立来

一　何百人　　役人

一　何百人　　大砲

右立第〻人数者如彰之清度以上

月日　　何誰

㊞

今数般敵を除くの外一切大報仕　候出は大国仕之
〻を義目之直りいく之逆罪人を数し生捕罪免し
かゞとき者ハ別限〻多あく生捕罪の軽重とおの〻者免洋
〻不免ハ殺は且　皇国〻清為とお考繆りは籠激〻不
行之および　邪憲之猶豫相死不祭〻免之和成は者と
ものあるべし如之お分へ右〻内寛之忠義之出嬉む者〻
情状有〻者ハ師式再興〻義生復仇意じ取扱ひ冤魂を

勲めいやう　了義坊文書時春主あく禁圍又も落魄以為
し居いめめも有々いたく是又お文く熱を以て寛宥し
拾遺　了及有　所妙法よい事
二月

変應四年四月廿九日

(※)御宸翰寫

朕幼弱を以て猝て大位を紹き尓来何といく年か王
政を対立し　列祖の事へ奉らんやと朝夕思慮を怠さる
ゝ寵を考る以中重朝政裏くより武家権を当らに
し表ハ　朝廷を推尊し実い敬しくて遠付徒輩
の父母としく恣く赤子の情を知る為、絶ざる振汁り
あし遂に住昆の表たるも唯名のみ成果を生ず為
て今日　朝廷の尊重い在て僅せし如あく霄壤の如

しかるに形勢ますます衰微せんや今般
朝廷一新の時に際り天下の億兆一人も生を不安ならざ
る時は皆朕が罪なり今回の事朕自ら身費を省し
心志を苦しめ艱難先に立ち　列祖の業を興させ給ひし
跡を履み治績を勤めんことを始めて天機を伺ひ億
兆の乗たる不背かざる為し往者　列祖基業を創ら
し不日の者何生ハ自ら將として是を征し給ひ
朝廷の政教ますます簡易にしてかつ公平ならざる故君臣
相親しくとこしへに愛し德沢天下に洽く　國威海外に
輝きしかるに然るに近来宇内大に開き各國四方に相

雄飛するの時に當り獨り　我國のみ世勢の形勢に
うとく因習を固守し一新の政を計らず朕徒らに九
重の中に安居し一日の安きを偷み百年の憂を忘る
ときは遂に各國の凌侮を受け上は　列聖を辱し
めまゐらせ億兆を苦しめんことを思ふ故に朕あらた
百官諸侯と廣く相誓ひ　列祖の　帝偉業を繼述し
一身の艱難辛苦を問ふ勿れ親ら四方を經營し億兆
を安撫し遂には萬里の波濤を開拓し　國威を四方
に宣布し天下を富岳の安きに置んことを欲す此億兆
四来の陋習に慣れ苟安の志を　朝廷のなすとなし

神祖の危急を知らば朕一度只を蒙生を非常に驚き
種々の疑惑を生じ第臣に紛伝し朕が志を安さ
らしむるときは是朕をして君たるを失いしむる
のみならず従て 別祖の天下を失ひしむるあり汝
信祇紀く朕が志を體徳し率ひて私見を去り公義
を採り朕が業を助く 神祖を保全し 別聖の神靈
我慰しならしめ生前の要務あるむ

右

所宸翰の通虔く天下億兆の蒼生を 思食させ給
ふ深き仁恵の 法教を以て未くの者を恐るを

教示し其り心に達を以て板國家のため精々其労を
尽を勉るを事

三月

誓文

一廣く會議を興し萬機を公論に決すべし
一上下心を一にして盛に經綸を行ふべし
一官武一途庶民に至るまで各其志を遂げ人心をして倦さ
らしめんことを要す
一旧来の陋習を破り天地の公道に基くべし

總裁
輔弼

一智識を世界に求め大に　皇基を振起すべし
我國未曾有の変革を為んとし朕自ら率先
し天地神明に誓ひ大に新國是を定め茲に億兆の名
を立んとす衆亦宜　名教に基き協力努力せよ
年号月日　御諱
勅意宏遠徳に洽く感激に堪へず今日の急務永世の
基礎此に出づべし　ぞ宜しく　敵愾を奮起し
死を誓ひ軍勉従事奥くに　宸襟を安んじ奉
らん
慶應四年　總裁名印

戊辰三月

〇正月十二日付御書

公卿名印
諸侯名印

行樹　清水　田安　半蔵

右は二田安殿より紀州に成り此度相来れ通しいる

外樹田　西丸大奥　神田樹

右は二官軍より一隊の古人数を亜に成り外樹田に

田樹に成り此度相来れ通しいる

坂下　内樹田　大奥　平川　矢来

馬場先　和田倉　一樹　雑子樹

右口〻人切官軍ゟ〻清書吾の〻紙差遣ひ
但し外文口〻〻外い敷〻是を〻通ひ
○同月十三日清福出
清水　竹橋　宋義
右三清門い清水田安由彦形に義出い者義ゟ外橋内
砲兵此不等に清兵有〻之ひ者の〻通行を分い不敢成
ひ
但し案馬案輿とも不差ひ
田安清門を長今迄の通り清彦形節の者の〻通行ひ
義ゟ〻紙ニ知ひ

○官軍より市中へ清福出張
今般徳川□□謀叛〻罪状明白ゟ付　剃髪ゟ於ても不
社ひ心清退対社　後出三次〻官軍一同に歩入ゟ〻お
成右ゟ付深流言等も有〻新江戸市中〻者大ゟ動
揺致し家財等持運ひ或い他不に引移りひ者も有〻哉
ゟお少へ不使〻事ゟひ然るゟ□□恭順の挽振上野表
ひ於ても後悔致立謝罪し歎願し欲申も有〻ひゟ付
大御慈悲より市内を以て歩入に延引お成ひゟひ
既ゟ去巳月　初使御入城寛大〻思召を以て　清不意
〻ケ條に　但後ひ安□□ゟ於ても承服仕月限〻通り

実效を奏し遠近上を慕ひ遠く徘徊し 法令法令一有之
百姓町人共より於ても元来 天子様法令第民塗炭
に苦しむを救い 朝廷素より 法令之に為右等之
次第を以て平日に通り安撫条理世に於い
四月八日
遠く官軍のおもむく所法令と為すべきも下
等に者共第一死刑等に有之に不逃家産陳不日
て作出食儀に上恐惶に不堪之事
東山道總督府
参謀

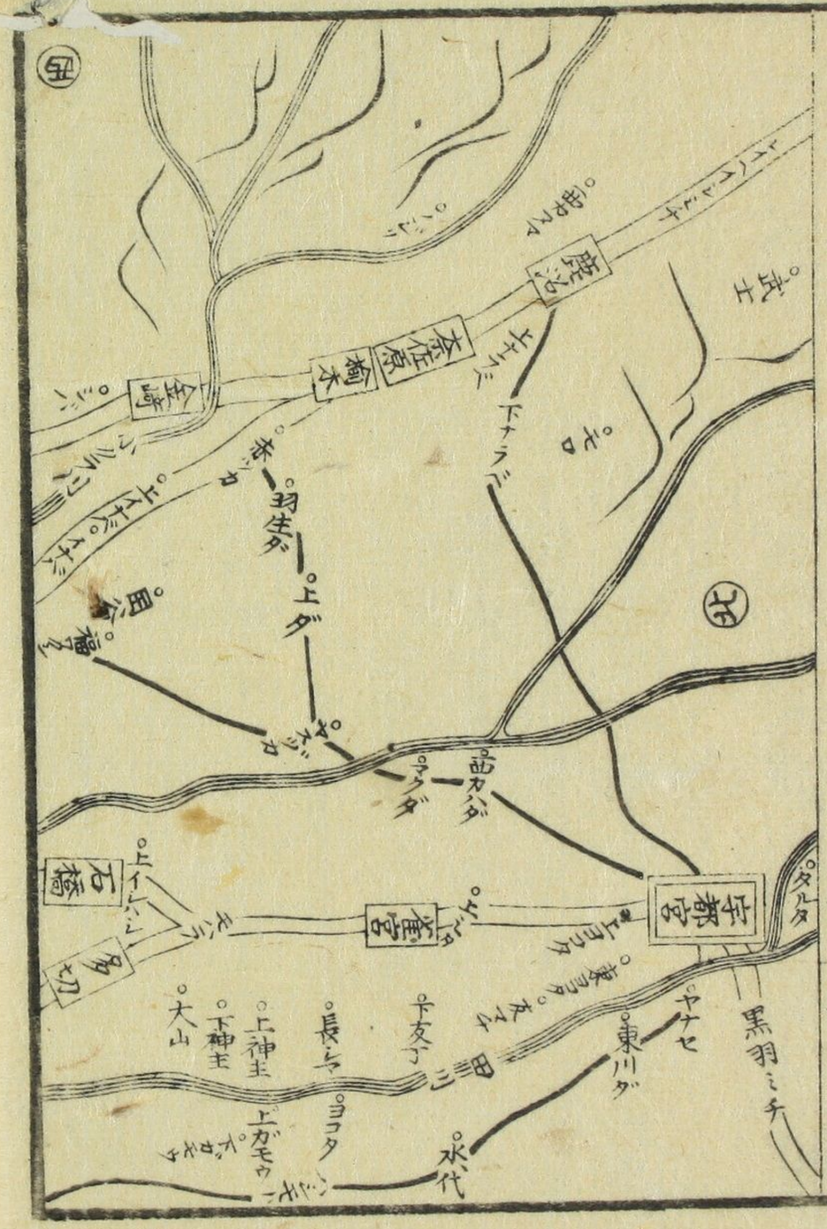
内外新報第十三篇

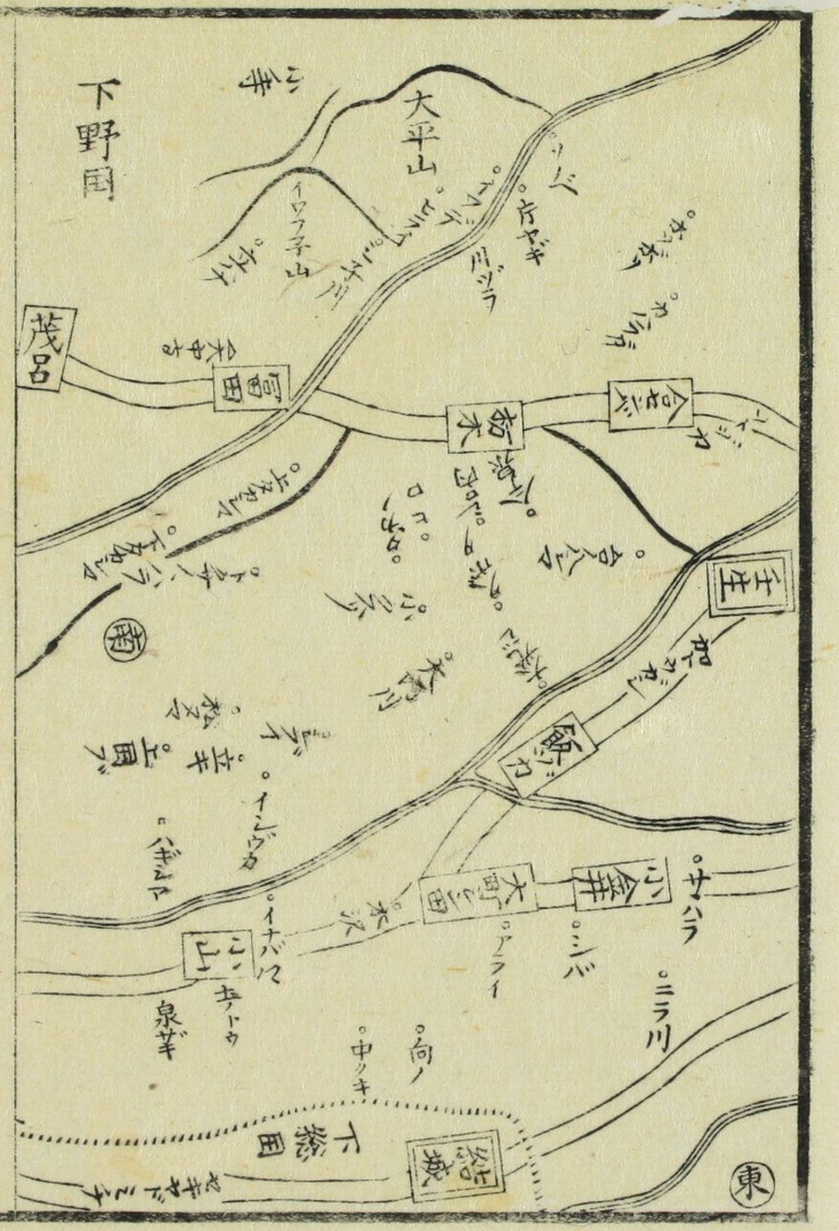
慶應四年閏四月

○野州足利より出立し去日記抜き
一四月十七日足利出立金校通り途中あく日陽天孫氏
より出会その出しより十六日右河を渡る張人
地集いあし居い後を官軍へ有之に付
字記実
鹿林
笠百
岩村田
毛生
右に人数小山宿まづ出あく不立より焼失あり右

六家人数い敗軍よりおれありいよ付　官軍初め六家の
うの人数のうへ〳〵ゟ撰出し大所村田あくまでく
戦争よりおよびい拾ど也行分数を大軍麦だこけの中
よりかく迄長砲数よりおよびまでよ岩村田の内茂人数
ゟラッの者有そいよ付表拾人数とゝ拾そだくを苦
是い変化人ども是元より砲発ゟ面しいよ付ゟ
ゟ〳〵逃きい迄中ゟ少い
一日日夕刻宮沈上町通りの表日不宮屋ゟ戸板
よのせ舁来りいものの七八人を所ゟかごよのりい者
十人ゟど是い表拾笠ゟ〳〵人数のよし段死い十二三

人と是い前ときり拾来りいと風少今日の戦争ハ拾
四ツ時より八ツ時迄の内ゟ
蓋ハツ時宮拾宮角屋へ
一十八日宮拾宮出立花宮まで来いゟゟ表連川蔵小
山武ゟゟ人上下七八人よ付合いよ付在をじの拾
ゟ表りい和田人を在檜屋よ迄前〳〵不ゟ〳〵通り付む
づらしき敵引屋しい新よ付志だゟ〳〵日不ゟく拾ゟ
拾表拾いへゟもて通り和ゟ表いよしよゟく
まゟ〳〵角屋ゟ引ゟく
一宮軍人数を元ゟ人位敵を大軍とだかりゟく行ゟの




下野国
大平山
茂呂
西
東
ニラ川
ミバ
サハラ
泉ヤ
向ノ
中クキ
イナバマ
アライ
イヌヴカ
ハキヤマ
ヒ田ジ
ヤ田ジ
ヒ田ジ
ヒ田ジ
ヒ

老と中茅和泉不中角屋あく彫りいよを右沼人例幣
供之金沼家へ弁五百人ばど引とりい拵不右門宿よ
り注を有くよし志ゐし志ゐぐらい小山宿よも今時く屯
集く人数為ふよれ又へやいよし風説

一此十七日の戦ひい大砲十五挺十八日の戦い門五挺
ふ捕くよ

一佐野須坂松本門出人数も此十七日大町野田あく敗
走の由風説

一月日是八ツ時沼袋来時きいよ分出色い為し秋よ入
り石橋宿拵為へ来日宿あく承りいへば此十六日の
合戦い十六日の敬とい遠ひい十六日の敬を行とく
へこ黄丸よ拵ゆいい凡を万人俗も有くい

一十九日石橋宿出立小山宿へ来りいとろいちゑん
志の為んの所中あく打合ひいゆ之を敗死人の死骸有
く嘉通りよえ前ふ為死骸三十人ばど見受やい

一右河口来りい官軍方八百人妻女板戸より清猿宿
よ拵ゆいとても山宿を むづかしく宮宿へ出りい不
見然宮濱拵訪通り出成志いよりく門をじ不こ歩
ゆ ゆりく農家口為ん敗し秋日ハ時色関宿へ秋を左

のこれ不出来ざれば其村庄屋より百姓
共へ書付を以て不申渡候者に為しめ
○彼是取日法を抄写
所々筋へ達す門より仁兵衛通り江戸町大丸呉服町七丁
右之門丁西國橋玉水町常安橋通り玉江橋より豊後屋
筋堀端橋より安治川筋安治川橋通所々筋盆二町目
浜より　所柔和と　拒兵隊の於軍中軍ハ左の門岸後
軍ハ右の門岸より隊列を整へ正々堂々　所柔和の左
右を随従致し進しいく後懐さり年々胡天保山に
所着和ス　○若く用を為なりし去落々軍艦仏國軍艦天

保山より距離壹里ばかりを隔て　敵愾心より発
と振り　着所と合図を見て直に敵軍熱督雲漢院宮
門鋪製茶屋子門桑港商大納言豊臣秀吉肥前軍艦電
光丸より発砲を仏國軍艦より也亦発砲し
皇帝陛下を祝し奉る石和所電光丸より答礼の意砲を
発し法艦を誘導し兵軍の方に向て航する事三十分
時ばかりして指出し天保山の砲艦砲台八ツ時過　所柔
和法及筋侍行列和のごとくしてツ時　皇所を守る○此
日供奉し法使の供連い侍二人に付二人下部老人あり
老和中い後供老人あり弾り供い陸り　所行列の後ま

後藤ノ○茶中後の兵隊人数い中屋以上百人小藩い一小隊あり○清水判と陣をんしゝく市中を生の市廛一零集まる多勢し

内外新報第十四號

慶應四年閏四月十五日

○

寒暖計の度ハ三種ありり「セルシウス」「アウシュール」「ハーレンヘイト」を之日用ゐハ多くハーレンヘイトを用ひ機械学家ハ多くハ「セルシウス」を用ゆ「セルシウス」い氷点を零度とし沸湯を百度とし「レアミュール」い氷点を零度とし沸湯を八十度とし「ハーレンヘイト」い氷点を三十二度とし沸湯を二百十二度とし故ゆ「セ」氏の六十五度ハ「レ」氏の五十二度「ハ」氏の百四十九度なり「セ」氏の度を「レ」氏の度ゆ直すハ「セ」氏の度ゆ直すをかけ五

ゆく割爲ル○「七」氏の度を「八」氏の度まるまゝ「七」氏の度
に九をかけ五ゆく割こ十二を加ふべし○「八」氏の度を「七」氏の度
にまるまゝこ十二を引きまゝ五をかけ九ゆく割べし○「八」氏の
度を「七」氏の度にまるまゝ八こ十二を引きまゝ四をかけ九ゆく割
爲ル○「七」氏の度を「七」氏の度にまるまゝ五をかけ四ゆく割爲
し○「七」氏の度を「八」氏の度にまるまゝ九をかけ四ゆく割こ十二を加
ふ爲ル○たゝへば「七」氏の二十五度を四をかけ百度にゆく割ば廿度
となる是「七」氏の度なり○廿五度に九をかけ二百廿五度ゆく割ば四十五
十二を加ふ是ば七十七度となる是「八」氏の度なり○「八」氏の七十七度
より二十二度を引き四十五度をかけ二百廿五度ゆく割ば五度となる

ること是「七」氏の度なりその所ハ推して知るべし

大政官四位以下撰定

一 此度■を改復ス

神武創業ノ始ニ倣ヒ祭政一致ノ制度ニ御回復ニ相成ハ先づ第一神祇官ヲ再興御遊ばされ追ヒ位祭典ヲ以テ為ニ行出ル依く此度改元ス七月諸國ヲ布告シ徒ヲ内ノ諸家執奏以下ハ悉く天下ノ法神社神主祝祢宜祝祢宜以ニ為ル者ハ向後大神祇官附属ニ仰付ル百官位ヲ始め位階等級ハ別ニ定ル所アれハ其

事

他し遠く法狀渡河英国法廷奠く英国に於て
出いたるものとし向き急警く英有くいものに付
出い事

一酒井雅楽頭殿江戸入系官位い事

一此廿三日未刻大坂表江　御機嫌伺　長州殿為　主
い陸中来い為くに布告し通りて其伺　天機い於ど
もいまず　天機伺不れ体者い来る廿七日迄　禁中
仮建て中上　大宮御所江も同ち　御機嫌伺て中
上い事

他し主国く面へ為石代金ほとりく日日て生
伺　天機い事
三月
○栗拓宮よりの来状
此月廿二日二本松藩の若松二百八十箇江戸より飛脚
ゆく利根川まじ流れ古河宿まで下し夫より陸路あく
国元へ引取て下しあく日光在中栗拓宮川家より長松
いあしい所いづれの兵あり　こを見分とのり二人を
切捨者為引ちどきり和くき奥足生所江飛脚打ち出
よ出ぬく

○関宿城下より来状

此月十五日法人九ツ人計至あり高地を通り堀丁
江沼至ハ和あり裏井町通りも人ハ多ク通り中
間十六日夜より作城術を竹井家と中和ハ戦争
あるべき間く間裏あり戦争有ハ為あり砲撃ハ
びたゞしくおきこへ響入ハ人ハ多ク在ハ
十九日官軍方操さハ戸町表丁ハ沼り晩七ツ時ハ
出夜宮井丁あり戦争有ハ新官軍ハ昨朝法士
方八十人余対孔と中多ハ在ハ来ハ風俗
あり強とおり不中ハ此ども有ハ沼ハ有あり夜ハ

勿論町方ハも為ハ有ハ付市大隊郭ハ在ハ
一十九日世日ハ家中婦人子供ハ此夜退ハ成り
町方あり人ハ多ハ此ハ夜ハ退ハ成り
体ハ間暴役人ハ出奔以為ハ戸町表町名主役人と
も行ハも退去市中空家ハ体ハ多ハ戸と志ハ為ハ
ハ大家ハ此ハ建具等完ハ捨ハ夜退中ハ人ハ
体為ハ仕ハ付為ハ行付方名ハ子供ハ一向ハ
城ハ籠居仕ハ

○

或る官軍の士中仙台大宮宿ハ出宿のあうハ作蜂の

行方知れずなりしを以て速やかに人を出し探索せしめ
よ主人と和わ様に相談あれ者ども聞入れ
ざるよう〳〵旅亭の側に住居せし者山野狩猟の治人な
ども其体の者為し居れば上山裏山と申ものを左の
如く定をも入れしなれども少所つ右宿無取扱ず
筆をとり〳〵
こゝに書あてたるかりし人なきらせざるなりの関の
山おし〳〵おそれ

○京地江絵出さく案

禁裏御用ならびに　禁裏御料まくい　禁裏御内あど

と舎(エノバウ)傍示杭標札等なる出さるしに筆い有くる為こ
とに以て定法に及ぶに付以来急度相なるべくも　御
料とのゝ書さるしに申ゝ　但出に事
但し標札に姓名相記しまくい宿名役名お記るし
に筆不若に付
一提灯まくい陶器を外表相なる筆の御役を書ぶきに
なるハ相なるべくに以来存べく新御役を取る付に
既変ゝ禁心者ト　但出に事
但し御用之付見まぐる　免に不ハ一点但出ゝ中
事

右之通私ニ仰出ハ条書をもつて御達ざるもの
ハ
三月

内外新報第十五號

慶應四年閏四月十七日

◎某官人達の書

小笠原氏の一部已ニ聞く近日蕃亜(ロシヤ)者とし
て国書を海外の一部已ニ聞く近日蕃亜者とし
て国書を海外の一部已ニ聞く近日蕃亜者とし
て国書を海外の一部已ニ聞く近日蕃亜

保護し生国の生灵塗炭を救ふ各国宜敵の大義公義を
当る所あり同志同約の佛国へも亦軍艦をもつて
東洋をむかつて生見那を問うんとせば生実吾国を
ものぐ如何を知らんとすれども忍ぶ生命の殺害や必
ずや右より東洋の佛国西洋各国を蹂躙(フミニジル)せ生内附せる
ものはことごとく皆内廷生邦内の小民地を奪ふ生
絶て生国家を失ふと察すべし私を逆くして生拒生国を
破るを出ずるあり今や英吉利は兵庫を去り佛郎西米
利堅は横浜を居生英の下風を好まず番国豈この二国
の下を付んや大伝を唱へ以て我　皇国を内附せんと

生欲して生志を遂のあるあく生我孝を以て行るがごとし去
かるを思ハ生彼他愚公しく彼生仇国を固守せんとせ
うハ是を生使を交えんや是動　まく志意示行生を生
る者百家をしく公義定り如はある者を生報国とい
えんや市廛支那の敵遠くべし　私廷を辱汗し　皇国
を内破去その責何人あるや況んや今日百年をまつて
しく小民生詳解を同えんと欲希くハ私意を去り公平
和尚をもつて小民が愚意を解んことを我願愚言

○奥州福島よりの来状

一仙臺侯の人数凡そ多弘百人以月十七日を以て福島

石操之丞お成い　御仗い一番目く内浄玉清城内に
運搬く吏之丞度い仙臺一番目に人数い白川口まぐ
出張之丞お成中い手ぐ戦手い来くよし

○

中分新開分十六号之製切の怪候とのをたり四月
廿日夜小門丁歩兵屯所之ゑ一人夜中の比寝所より
起きく厠之往きし之丞突然と来すく既之
突当ると見るよりく再び刀を抜きく飛出しその
まく率倒しく人々をまくに人く集り分捕せしゑど
既く正体之成たり考るる磐いかちく二三百も離

去る地上之なりしとて生い狸の崇りもりと
人なり毛石中之稲荷の狐なりく年久しく一ッの狸住
めり先士為合掌を狐之供されでらるる時人加るるもまくに
ゑく行失せりと考るる此人加るるもまくに
是のわど戦生之小石をひろひく狐之抛付しゑ打よ
く格子の内之入りしゑど後者く二三度抛とくその
まく内くなりしが是夜磐を切られたり候稲荷の
狐之狐の住まびしく狐の住しい一斉事とゑ聞し

○

同日月二日午後零時十五分之不川神の加くゑ為り

く砲却きこと横濱より放くれ國永祝砲をうつらと思
ひく神時儀とあるより砲數の百あるもいと秘なるを
十五秒なるもいい一秒又いと十秒なるしく時百そろ
さしてその高も空砲といちぶひくなるより動きなり
翌二日の夜十時ごろより本石のうくより火の光りそる
夜中さしてく滅せしに五日の夜もまこと日しかくより火の
光りをなる秘德市門、八時、紀楊の為より戦爭なりし中
ありさまどもつまびらかに確報をなきまどうよを詳
かること式のきび

○

野秘宮紀宮い伊勢動ケ中の測量より是ば日本京坂
の東後日度十一分二秒和律三十六度三十三分三十
秒より方ろ方ろ江戸の城より方位いるの六度十
一分距離い東後二十日を二十九丁余よるを路の
歩出なるを以く旅行の里数い二十六里十九丁ある
とつふ

○

一同日月三日八時市門の為より戦爭ことなり法徒中山
江陣ごう　官軍ごく義賞徒有るを秘慶秘法を来
阿秘義為るの出人数市門より出ることを出しより成い

和泉使中山のよしより發砲以前しいかもむきみく砲
撃おびただしくおそへ犯まく　官軍ハ人数百人発
の業級之級みくのり出し協井猪ぎゆ急まぐこぐせ
いとろ右級ぢもい敵ぐくまとしものふいすみ
ふくを中ま発とこいよしみくおぐふくり岩より脱
走ぐくまいやみくうま発砲以前しいやうきみくま
まく砲撃おまこへやいい　官軍ぐく怪我人ハ多ふと
やうまを出ない
一細川侯市人数市川のほおくにかこめいく張りい
とろ曙ハ日ハ乙ぐ刻ぐろにいこうまおあうやいを

右い行ゆへまいい敗走ふりやさぐを接脱走方
戦争の場ハい引上ゆいづをまを屯張以前しいやおい
走中さぐ行徳より和船迄い大半焼失のよし
右い某代の藩曙ハ日八ちく迄まぐ来りいものく
伝聞のよし
○ハ月十四日出よ浦よりの来状
一文彩（カラ）より西蔵国を通りぬ者岩山をこへ「トルコ」と
普西亜の百ま発を到ぐく
一遅羅国い法相西のるまこちまを
一文彩国内南時平穏みく敗羅己法国と条約を改定

し貿易さきんを始まるを

一天津より難題紫衣の地方に狩猟を他を大隊車をい

くを小倉国の物産を運搬せんとす

一支那を改ことぐく西洋各国の法を学び英吉利の大

学師韋先生をようつくを招き国政を改

さを他軍勢を西るまぐ〻ぐく洋法を用ひとそふ

内外新報第十六號

慶應四年閏四月十八日

◎同月二日出板タイムス新聞の抄譯

小方の佐國より西ぐく新政府に対し移処新を謀の

書状を小西の者より出さり即ち左に記せる大名及

び藩士会津侯を捉ち帝に向ひ戦んとする会津侯と

連合せし中その大名ならび藩士小川大炊頭

同大隊ち又ち及ち丹羽長門ち津軽越中ち南部美濃

ち佐竹右京ち支倉遠陸奥ち同若狭ち相馬大藩宮中

山内中ち松平□□□□と板垣正大隊酒井左衛門尉ち

文□□□□を始めちとんどゐ國筋の大小名こぞり
て會津作に參せしあとを名まして多くを多し右ゐ軍の人
數追て增加し二十二萬五千人に滿しとそふ右の軍
勢江戸より凡そ二十里ちどを多を一番に人數を配
ゐし要害の地に陣を居るよし
右文ゐ玉の者より伝しとそふ世状い奥羽に春生
京村の商人の名に為る横濱を來る途中の横板に
記しそ流布りゐ又ゐ平素作い書ふ日ち江戸平濱
ゐ右多い右庄の挑民ち宮内少輔その復るるとそ
ろそく荒廃を碧にしそ大に人を惑ゐを玉る今

更を掠奪しそ以て流に布告を
才天月八九日以即ち我四月十六七日薩摩ち佐戸田
長根即ち井伊掃部頭作多そ熱人數凡そ八百人ゐ軍
の伏勢に遇ゐり小軍い為そ南軍の為ちじを計り知
ちし少へ麦留の石に凡そゐ五百人ちど埋伏し南軍
の往ゐき所まぐ来るを待更に一度に起り急発砲せ
り南方勢八百人に内免走る者にづに三十二人
ありとぞ右い江戸より小に方に為り下総流波山
のふのとに一ヶ村の近急にあるを記しよりあり
右ゐるに南方の勢い各本國より多勢の援兵を以る

よりて小國侯の江戸を恢復せんことい是來あしと
で我等記者 ものぐ討論せしごとくは戰爭の終りいる
が會津藩殺免□□ 紛延するあるく一の儀事官より命ぜ
らるまるべし

○

福沢諭吉芝新銀座に塾を立て慶應義塾と号を因り
月三日工綾を立て始しめく塾を初めく今生塾記より
入を立る故ものより載を生塾則と其号とに至をくい
他日より入るべきまるを

慶應義塾記

今實に會社を立て義塾を創め同志諸士お共に研究切
磋しいて洋学に後事をるや事ども私に行ひ廣くこ
を世に公にし士民を問ひ苟も志あるものをしく
來学せしめんを欲するあり抑も洋学の中に興味を
始を引るに背事保の以長崎の役官業者和蘭通志の使
を引りを國のを傳を習ひんを乞へしに速に允す
を賜をぬ即ち我邦の横文字を傳を習るの始めあり
後家塾明和の以書未既陽余を著しく生学を著昭し又
蘭學業化桂川甫周杉田玄白等起を学ばしく以く和蘭
の学に志しお共に切磋し者以る和ひと雖も洋学業

昧の世あるべき書籍をしるしくとつくと学ぶは所友未考
をば遠く長崎の保官に就くを慕たしきを叩き偶て和
蘭人に逢ひて実を質せり蓋此人て熟世も英遥卓後の
士あるべき長管自我化古の業はのく心を委孫日夜研精
し寝食を忘れ玉きり或い偶ふ業化菊長崎に往き
て和蘭佐七百脇氏と学びて其に古人力を
用ゆるの切なるを学の難きとを察せべしを後大槻
玄沢字田川槐園等継起し隆て天保弘化の際に至り字
田川榕庵及び坪井信良等蘭仏院南杉田成卿兄弟及備方
供庵等接踵出さり是陰や後世伏文の法漸く開き徒

家儒侯の書陵侵世に出るとを雖も概ね和蘭醫藥に止
て旁らを究理天文地理化学等の教科に及ぶのく故に
高時此学を唱しく蘭学と云く是蓋此時と雖も通商の
国は和蘭一邦に限りを来航せるや唯西陲の一長崎の
と有るべるを世態の変きに伴ふく熱て俗学の名高だ
使ふ〳〵ざるは多く隔靴の憾を免れべ然るに嘉永の来
亜英理等人我に渡来し始て和秋貿易の盟約を結び又
を欧を英仏等蘭等に通せしより我邦の形勢遂に一変
しせの士君子皆彼国の事情に通ずるの要勢たるを知
り国を挙て百般の学術一時に真り者を学を前唱し生徒を

教育し世を益々始て洋学の名新生り芸豊文学の一大
進歩あるべしや顧ふに一車一運の勢に国ちんとするや
進むに必ず漸を以て之を警へば牧樓閣に上るに階段の
るが如し乃ち天保弘化の間蘭学の移植せしい宝暦
明和の依哲之を階を為し一方今洋学の盛んなるい者
国の通好に因ると雖も実に天保弘化の依之を次階
と成さり然らば則ち吾業今日の盛隆に遇ふも古人の
賜に非ざるなきをいんや彼洋学のいく洋学たる所や天
然に胚胎し物理を格致し人を利益し身世を益求を
るの業にして吉実を安個大備具せざるい者く人こし

く学ぶべきすらくさるの要勢あるべきと天高の学と
偏く可あるべんと吾業は学に後事たるや後に年有りと
いへども僅に一隅を窺ふのみ百科浩瀚を望
洋の嘆を免ぜざる一大事業と称をべし然ども雖
を見るく未だるい丈夫の志に有るべきを知る其
きざるい報恩の義あれに似たり蓋し世学を世に捜も
んにい学校の規律を彼に倣ひ生徒を教導するを先勢
とに仍く吾業の士お其に彼に倣ひ彼の英国学校の
制に倣ひ一小区の学舎を設ずと創立の年号に取
く倣ひ慶応義塾と名く今茲四月某日大木の功を後

為新先生舍の規律勤戒を堅くし生業の士千里
笈を携へて此に集り力を盡し智を養ひ進退必ず禮を
守り交際忍ず道を重じ以て維持世に渝なきのみ
亦國家の爲に小補あれとあらば且又後來此業に倣ひ
益々生徒結構を大にし益々舍社を盛んにし以て後來の
吾曹を得るの多き吾曹の先哲を慕ふがごとくれを得て嘗
亦一大快事あらんや嗚呼吾黨の士協力勉勵しく至切
と奏せよ

慶應四年戊辰四月　慶應義塾會社

○正月廿八日伝使より出書写

德川□□陸奥梅津恭形く藩金附罷く実效れ立ひたる
□□く而分是家名社色ひて付相續人あらんとの秋藩
ゟ後嗣儀公論を執る　御裁決ある様　思召ある儀
事有りては百姓後世七日まぐるを見込て義封書を以し
生徒をもつて大政官に可出様社　伝出ひ事

○閏正月十日伊豆国伊豆大小区用付江戸渡し
書付の写

別紙は書付續拙熱督府より社　伝達ひ条件藩家掛家
く相心ひ所ゟ偽慎て義生名来まぐ中論しひ様

「マ」紙ニ中淡ハ
右之通西安中納言殿より紙数ハ百向と石濱迄ざる
拵マ」紙ハ其迄ハ
閏四月

朝廷寛典之御不意とのつゝく徳川家名絶之下ハ百上下
一同後拵マ」紙迄之名先其迄ハ表之甚無之
後狂脱老之者之迄ハ近日不之也集暴儀ハ之限金
く徳川家名之対数念ハ抱きハより右之不業ハ
ハ京ハ弱く始末あくハ主人□□恭順一途之意之ハ

ハ度り自然結局之御不置も迷惑ハ
安堵之儀ハ取り忘マ」中ハ百向接ハ
ひ之」抜来之まゝ篤之中ハ
之之家名之加論相続ハ
爲之同都数念之抱ハ
実御ハ之事

閏四月

○

東海道鎮撫
総督　印

仰意「ミコ モト」意ハ

も考きされど一艘い亜船フレカ二艘い西洋形日本
船ふるよしうもく勝敗い保ッあるべきいんどもの日
町に孫丸来をしとえこ

内外新報第十七號

慶應四年閏四月二十日

○同月二日出板「タイムス」新聞抄訳

横濱港の商船

英吉利船九艘

亜墨利加船五艘

日國茶船船名クレートリパブリック

普魯士船壱艘

蘭蘭船壱艘

英國茶船船壱艘　船名ゲンジス

月港沖に軍艦

英國軍艦（イギリス）　三艘

一プヨルム　大砲三門　弐百三十六頓　六十馬力　船形

ゴンボート

一プナップ　大砲三門　月弟　月弟　月弟

一ラッツラル　大砲十七門　九百五十頓　三百三馬力

船形コルフェット

仏國軍艦（フランス）　二艘

一ヴェノス　大砲廿二門　三千頓　五百馬力　船形コル

フェット

一ゴイラン　大砲四門　五百頓　二百馬力　船形月丸

亜國軍艦（アメリカ）　三艘

一モノカシー　大砲十門　千百十九頓　五百馬力

船形ゴーボート

一ストーンヲール　大砲二門　千四百頓　船形スチー

ムラム

一イロコア　千百十九頓　百五十馬力　船形コルフェット

蘭國軍艦（オランダ）　一艘

一キユラッコ　二千四百頓　船形コルフェット

○同月三日出帆港よりの来状

一昨二日昨方　官軍方八幡町より出老し不脱走方中山
村法花経寺より打出し引つゞき市川村急ぎ戦争
より村成り同村兵火ゆゑ殘らず焼失当同村もより去
同時の急を外孫ゲ原菅野辺ゆく戦争有之　官軍の
人数遠く出探出しゆく当村もより出通行同所村に
い所人数陣ゲ脱走方船橋方中途に出張系木村
二候村海外村等より出て見まく戦争ゆゑ有り不残
官軍方原田筋堂の人数こゆゑ海面より船を見し
船橋宿浦に来き同所より大砲打ケ時日より時絶
夜の戦より同宿より八幡町辺百のうち焼失以為

し打続き合戦休るゆく今日も不ゆく戦ひの宿中より付
来ゲ決死の勝敗もおるうゲ当村い戦場の去中より
ていまゲ兵火より所ゆゑ里不中ゆゑ出上ゆゑ
成れ外雑計一日為ゆを踏む人地より発生い

○同所家宅風聞之写

二日巳八ツ時ゆ船戸口番ゲ　官軍居山勢百人程
曉七ツ時ゆ八幡町ゆを平田村に探出し脱走方市川
村田腹切地蔵と中下より小筒打かけ　官軍市川と
うゲ村宿に引上ケい中市川当下急ゆく官軍ゲ
大砲腹走勢船ゆく小筒をうゲ打合より船橋

の方みゝ大砲置田野と戦年

一脱走方い松橋より二ヶ村先ある大久保村へ人数引

よいよし

一同日夕七ツ時江戸表貴賓市門を渡り大砲二門人数凡

そ二百人程みゝ八幡町に操出し市門新田通り

一同日ふたゝび又伝太郎人数二百人許松戸宿に一泊翌

暁七ツ時江戸表ケ谷宿へ出張し不夏日村より脱走方

暁七ツ半時江戸操出し吉蒔沢と中原みゝ戦争相始り

怪我人多乃治又有それ以ども勝敗の義いまだ

分り不申

一同日夕七ツ時江戸松戸金町実原へ猟師人数相固め

一同日渡し船止る又日船通行又あり

○同月六日出板「タイムス」新聞の訳

江戸より和の方へ去る日曜日即ち我国日月

三日戦争なりし戦の起りし地ハ江戸より四里の内

ありと云ふ

いまだ世戦争の委細いまだ詳らかならず今日報告

なゝんとおもふる○去る日曜日の夜江戸および近

辺数ヶ所の出火なり高地よりも出火よく見へた

る

○

武人の話しに英人「ハルトリー」い当時大坂へあるむきに江戸堀二丁目西へ入かつや町あるに警防西田氏の洋式に日居し醫を以て業とせかつて能来のおとなきあるに於る時「ゴム」の笛を多く仕入きこと一種の氣を單めに鉄を有るきの糸を結くこれを室中に曝げ糸の来たるに結ぶ者の町くと拉ぎるに到る者辞を有て金を出しくこと色を買たんと望む者多し故に大に利を得たりと亦善く人氣を撰るるに妙と於て和語に通ぜ近隣の小児等に集

まくハルサンハルサン」と心易者に来るとよぶと無勢のおりもよく見に善ふとで実に一時人と以ふ者

○数年に数年に結ぶ者も都にのるるに時代を経タあぶれ者りそよめる

たりそそびあびきもゆびに枝ゆて風まうぐうぬ

考証の義

○正月晦日出尾物宮宿よりの来状廿七日出と

いく木曽路経路表よりの手紙あくや来りに

よし

脱走方の史あくに元百人ばど越後路へかし来る

日〻人数おましし越後勢と戦争ありしよりの伝説
阪山城主本多相州作人数と戦争ありしより阪山浜坂
由城主も来りし日囲松本阪にまぐ先を押来りしに
も大和尾州出張にて向ひしにわづも羅計既に今日大
出張頭先に二番三番を出まぐ出撫出し伝説出張にて
国々出を向ひ和成中に

○弥生の比世の中いとさわがしく
世素いよるの後比山さわらきくかひもまくあるぞ
よく人まうべ
るべき

内外新報第十八號

慶應四年閏四月二十二日

○閏四月二日出京新聞よりの来状

野州戦争一条ハ付法蓮寺人数出撫出し大坂表より
兵氣新あるく出出帆宮〻清水に出着と芽春に来る
不尾州大納言様四月廿七日中仙道守山宿迄御入
八日大津廿九日京都出着と新聞先編と廻廿日当
山宿出発当途中より織田引色しに和成中次
第に伝説松本藩城松代ものづき板本藩と英法藩
に押出しに新本藩より手を以て名古屋表に出

注進仰付候ニ付ては人数の三日を経
残り候ては引続き病人多く大坂表に居れ候代
極内密に病人多く近辺の諸国に散し又ハ横
須賀吉田宮の尾張三河遠江駿河の大名方残り候
内密に遠国と申多く来坂ともこと〻の外殺ケ
敷多く申候

○横浜より出し

横浜病院

但し横浜病院及び虎疫病院ともに出来せ
しめと被為

右病院に入る病者を人に付一日の入費左のごとし

第一等　四ドルラル

第二等　三ドルラル

第三等　壱ドルラル半

日本人を雇人「マレース」人　壱ドルラル

右病院に入らんと思ふ者は病院掛り「ダ、ブリヨ、エイ
チ、スレス」及び「ピケット」右両人に内証「ゼ」遣ひ
拾我人多有り「スッレッチャル」入用に付は差出し「ゼ」ヤ
是は帆木綿にて製したる物にて両側に棚有り此
棚に病人に和早ひ内へ病人を載せ恰も物置の

ごとき記事あり

金銀等を以て名義書籍物等を各の施物せし病院の掛

り手より交納する事

横濱より於て弗八百六十八年

十月七日

エゼーヲ井ルキン

○大坂表よりの風聞書

一薩長両藩は幣軍艦を大坂出帆し国に戻り伏波に

押寄せ支より越後新潟に向て拵る人数凡そ

弗四五百人との事

一同月十日東南部カケヒラ地方に各国の使節

天機伺として罷出候て項載物頂戴されよ

○行在所日誌抜粋

四月二日城内を於て各藩に兵隊 徴覽 拵有

之候に付通り 但出さるる

昨後又日行に刻 所数輦流陣 天覽の為め城内に

行幸 但出る事

所道筋の儀い表御門より安土町通り場筋右へ本町

通り若町まで右筋左へ大手筋より 所入城の事

但し雨天の節い御延の事

廿日

廿五日雨天ニ付　行幸所附延の為ニ　出発

廿六日行の期過　市毅輩「為」　左衛門ニ兵隊を差遣

市毅隊ハ少し申ニ出発早四より城中二の廓ニ拔ひ屯

集せり爲ニ別城中ハ九彈隊　天覽所へ　為「市毅」

左衛ニ付一兵隊薩州義州越前の人数隊列をもつて

ニ陸ひ俗の彈隊場ニ進ミ運動発砲をもつて終ニ退ぞく

次ニ第二隊長州の人数隊ニ第三兵隊細川肥後北條の

人数隊ニ至り順序をもつて彈隊場へ代ハるがわる進ミ運

動発砲をなし右操練終ニ各藩兵隊へ酒肴を賜ふ　市

市法ニ従ひ左ニ通り

今日調練左儀ニ付　恩命酒肴を下し賜ハ事

右院陣　敵覽悉くお添ミし後　市出ハるに天皇ハ

市巡覽ハ　左ニ市馬見不日　附市儀ニ乘馬

天覽「為」　左右ニ　出ハ多り此ニ於て公卿法服各

馬を市馬場ニ引ハ出ハ乘馬を始めたりしニ大ニ　敵意

ニ叶ハ出ハ一日行ニ而　孤（カツ）を逐ひ見出ハ

ハ出ハ頻（シキリ）ニ孤を逐ひあどしく　天覽ニ供し申ニ

至ハの事ハ城内　市毅輩法ニ合ハ　退散「為」　左ハ

四月八日午後米利堅国「コルヘットチプレキス」船名
指揮官「カピテーンデフリケイト」第二「ヘルガスヂユベ
チトワールス」人名英吉利使節信ガ「エヽビミットホル
ト」外之所記案　之を補弼中山卿所対面ありて米国事
勢為利事情引き蓋し遥日　皇帝陛下所機嫌よく
御玉輦の御歓びを申上げるあり未の刻退出せり

○

同十一日己巳刻東本願寺掛所江　行幸被為在儀之
案内ありて　御対面ありて之より彼国の演武場へ　陛御
出為　玉輦の中より御親兵の演武を

天覧ある　拝相願之　入御後ち議事院議義の事を法
令出　御座し間江出　石出親しく　天顔を拝し奉
り儀義を始む杉浦肥前守大学頭を従し田中国
之輔孫子の策攻策新田三郎三器を上器を策し奉り外
の如く文武の名を偏廉あり至り盛り無きを無き
思食の後御酒有難き多ありしや中刻御引取
御機嫌よく　御還幸　なりなる

○同日　伺出の写

来る十四日外の米利堅使ひあり元陸軍所江移り法令
名義法兵用練社　伺付為義務為軍防為見分の為め

仕長出羽　庄内沙汰の事

四月十一日

○

同十四日庄内の本城より各屯と兵隊元陸軍所近辺に集せり時刻の指揮に随ひ第一兵隊操練不日に進と網練を始め第二兵隊代り進と網練をあれ第三より第七隊に至るまで準去年の末刻ことくく後々退散せ

内外新報第十九號

慶應四年閏四月二十三日

○甲府よりの風聞書

一甲府城代水野出羽守人数四小隊無勢弐百人許に
て退去佐倉へ陳取

一撫川勢百五十人ばかり長禅寺に出陣

一奥平勢百五十人余り柳町に陳取

一遠見川内筋百姓騒きたるのよし

一越後新潟より上陸の脱走兵出雲崎より佐渡に探
かゝり川岡丹波守川中守佐山遠江守に戦事有之松代へ

致殘らず甲地を引上ゲ中ハ勝敗い未だ保のふらず

○同月出羽より の来状

同月廿日出羽庄内より注帳ヲ相成り候ハ浪士天童ハ勿論城下町家ハ焼ケ残り山形ハ向ひ城備之交有ヲ決し家上川筋ハ大合戦ヲ相成り山形ハ市中のみ戸メ切り三日まで引つゞき打合ハ未だ山ハ屯仙台より也遣ハ清加勢清撰出しヲ相成る為く沢之侯殿新庄ヘ山形人数と共ヲ清出張ヲ相成り候跡ハ右戦争始ヲハよし山形のめの出しヲ生ハ

九十一

⊗同月十二日　朝廷より清布告の写

先般　清警衛乃ヲ　清家輔ヲ以て清布告ハ　出ハ通り　朝政清一新の時ヲ奪り越ク苦易賀器ク　思ハとゝ　清国体清更張ハ為ヲ度ヲの清事依ク清ハ故備為も　清類意ヲ好徳述ヲ改令ヲ大変革致し　宸襟ヲ安し奉り候ハ極ヲ深く　天下ハ後次第勿論の事ヲハ暇令慶元以還受封ク国法制令ヲ為ヲと雖ども当今の時勢ヲ相合さるの後ヲ新然廃弃致し清一新の奏本ヲ相立ク　朝廷法為一致ク全力ヲ尽しハクこそ日新の　聖業相成ヲハ清ヲヲ有ク然る　朝廷將門の政權ヲ

清私臣し社稷に尽くさんと欲し候ハヘ共 朝廷の
御事のみを相心掛ケ候者も有之候ハヘ共 国家の
事ハ忘れ者 徽猷を其体徳一新に奏本を建るい才
一旦習因循を打破し賢才を挙げ国政を革むるハ立ち
然るに依屬多くハ任擬をとせざるに門閥を以て政
柄を司ハ様に随て旧習弊政諸吏雇除に慣て有之候
分数 朝廷に対奉り恐縮門流と社廃ハ如何の事
有之ハヘ共依屬に対奉り世禄家格を以て政事を司
らるし方今の事体に相合ざるひい庸劣を任に堪
へざる者い進に廉恥し肥常に抜擢を以て賢才を登庸

し国政十分に改正致しいく 皇国一体復古に御趣意を
貫徹致しい様 御沙汰ハ事
有に通社 給出ハ上い依屬速に実效お立て申若し
各用に対れ心の社因循に有ハ向い不ハ速に御取化
して有に依ハい速に備国巡察使社出向致し政績
了社 聞召ハ当世命お心の社申いか

○

第十七章中に伝聞阪山藩城に事をの世に在い全
く偽聞の誤にしく本月七日頃不ハ出府に有のに
就て世に確説を的多

越後路より来たし脱走兵仮山を攻め城下焼たゝひ戦後近戸隈の賞又おゝく戦車よりおよび仮山劣敗走のところ真田く援兵を以て落城せば右沼徒討ものとしく尾州勢三百人洋出張去る六月信州仮田と通行せし也

○

四月橋頭開子規西人踊躍東人悲踊躍悲憤不免偏已
見戎虜移伊川六十六州固兄弟棣蕚願使金甌全君不
見望帝之眼高千古蜀王宮殿棄如土寄語世間忠義人
何不及時修廟戸

失名氏

○贈青眼居士并和其韵

欽君為國起諸賢無用吾曹便泰然小院沈く春晝永床
頭笑掩十三篇

六橋外史

⊗徴士井上石見建言書一通

蝦夷国拓くるゝ付器械を製造して人力と有器とる
の策を勢と事なれ有言上仕れとゝろを策如何と又
又 所下問と蒙り愚針を願ふべ若く書私のまゝ献
呈上い

英氣器械い俄又製し雅々進べ先づ水車の一事をいく

考るに中箇の車おくも六十四を巻く故に一回毫人の
労に代る所の六十人なりなるの理あり我国民の大数大
凡四千萬人とまるるれを一日二拾万石を食し一人白米四合
の割を人あるくあ斗づゝ巻くあるを一日四拾万人に及ぶ
試に右に四拾万人に雇賃とふふるとするるれい幾
多の失費あるやを酒造等に用ゆる米の米穀を加ふ
るるれい弥莫大なるあるを一国我の幸を計るに遠
く変に眼を点さを天下に富強いあるべきを必
然あらんと人い井中に横ハシゴを下しれを没しむる家の
らん進ゝ是を見く愚とし何故に井戸車を用ひざるや

と怪しむべきるるを我得んや世人かる一家の小費い惜
まを易く顕然たる国士の費を惜まざるい歎かてし
きことを世人い人皆一家の度支を見るでゝ一国の人
民と費情し遠く器械を以く成し得る限りを極めを是
に人力と費さゞる深遠大に思を巡さべ富家富強と
あれ事又何ぞ鮮かんや

右愚意の概畧に過ぎ然る変見を一家生業のため
に水車と賃んあるあゞ利ふりの有てれるも地所等の
故障にあるを世賄賂を得さを作さゞる者も有て我
に承りに右等るものい天下に大差あるに出る事を

知ざるの勿論なれ得ざるものは来れるを限り公私の書を節い公私理事御無之上国家育を幸い迷ひ御老体しを相成度仕下く形を不社為ら 宮内の御対あく十分御身を為ひ世上もあれ御事と存ぜ候上敬白

井上石見

内外新報廿號

慶應四年閏四月

○同月十日出来更津よりの来状

一去月中より当所北光寺せし活使去る七日帰ケ崎沢の近をある御使と云村る出張せり官軍薩彩紋一隊と戦争相成り辰下刻より軍敗を退去せし中也つ近隣連合の備家恵援の兵を出せ者あるこそ不後より合戦やく殊兵尽く何地へ退去を然ども近傍の民家兵火るかるるもの頗る多きよし

一高地市中の騒き一方ならず婦女子の泣叫ぶ声すぐ

しく然れども和蘭会よりく大機い和ゐく江戸の方に
逃退きけれ
一八日酉刻より二三里陽海岸の山合ひゐく砲烟ゐび
ゐたゞしく相見へ日夜ゐるゝ失火有ゝ曉天より玉つゝく
絶滅せり
○廿五日之寸日昨我国江戸九日或る外国人より
横濱新聞紙局に送る書状を抜出き
余今紀「フランス」波戸場を通過かゝるに敗る雷管
を焼け放発せん斗なる用意せ〜ゝ流を勢へたる日
本の歩兵凡そ十六人伴うゐ和蘭より上陸き或見か

けあり
戦闘よ関係ゐき地と通行きるよ新く寄港ある蒸和
とゐん事い恐しく外国ゐくい伴さ生ざるゆあり
横濱の地い国より日本の国を屋きとゝ(ども)紫(々)
漂せる間と携へ多る兵隊と上陸せ〜めざる抜日本
政府へ掛合ゐうく結るゐ所ゐこと有り
、右く兵卒護衛の気質も文よ相ふらゞ一区何ゆゐ出
来せゞ急ち兵庫の蒸滅と路ゐよるゐ
此日到着せ〜死時和よい引よ新聞も重く唯「アビシ
ニヤ」の戦争い幸よしく早まり「ゼヲトル」い死し保虜

いたりてくく敵さまたげり

「アビシニヤ」戦争のなかばに達する横濱「ベーリー」新聞

より見へたり「ゼヲドル」いえ國王の名称虐の者あり

去る廿四日三十日即我四月八日の夜箱館の外國人

居留地殆ど焼失せり

○仙臺よりの来状

去月中旬の比會津追討として仙臺勢撰出し一番手

は白川頂より出る丈より矢吹須賀川郡山宮二本松

福島郡上桑折より渡頂分まで引續居りは不令津勢

備前代より山城山あり郡上陣営と藩醫つめしは也

勝敗未だ詳ならず

○首夏書感　　失名氏

漠々愁雲西復東起居淚滅草堂中、昇平二百餘年業、

誰把　神恩付太空、

○

伝聞高須頂より去月廿八日出立して来りし者の話し

は世間彰深より脱走無之人計り歌舞として上京の

就は付尾張人数右岸面めとして和國橋口向入れ也

道中まで野州戦争の情狀くと有て危角□□敵敵の汚

名こなるるうちい戦ひい止むまでとの風説なり

○題えんに　山侍義祥

大きゝのみちはく見くはぶこぞそる囲いうみ芦の
はるゝ海しき世平
のとゝ〳〵と初りく日も形さ素形ゝうらやまゝく
もおい咲ゝう

○同月十一日東叡山よりの御達書

宮様御上京後つよく来る十九日　御發輿御治定
の事同光寺石其外御配下向い不及申麾下士多輩
江戸市中近在近郷名哀訴歎願中出統中市民共近在
近郷〳〵後を身命をいゝく甚遺　行樂有又孫　御發輿

に相成はゝ商業をも相廢は類も中出日〳〵東西よ
奏をは中不容易騒擾る有何分　御發途延引遊は同
御上京後人心益辣は追御延引　御出は同不
御様子い通達ゝ有ゝ事
右ゝ分同月十又日東叡山ゝ御達ゝ備ゝ山伏
百姓町人名寄出御奇御山伏名正脇ゝ孫ゝ分之
流よ有ゝ見物弱貴様集ゝ為ゝ中
○四月廿又日熱賀府より金澤ゝ御書付共よ
御達書
松平肥後守事退ゝ暴動よ及は類よは得之既よ罷冠

く後一等級昇位上の悔悟伏罪所仁慈を垂れる旨
くの寛典を下賜し給ふ向に將遠き根下仕奉 所沙
汰の事

所沙汰く就紙有所仕れ徳川家名く成行不見
屋内を御罷仕同安受諾る時を向 所沙汰事
いふと

熱脇府桑傑

陰居

松平肥後守

熱脇府桑傑所中

○

頃日我社中より新聞を投與する者比々相屬す是を以て
未だ稿を脱せざるもの半筐に及ぶ校合出來次第印
刷に付し得共前後時日の相違多分に可有之看官の
着意參照せむこと希望す

中津侯歎願書　仁和寺宮上書諸方の届書等逐次記
載すべし

相州小田原武州八王子邊に浪士屯集の報告あり
大君御辭職以來の事を知らんと欲せば追々發兒する
所の前記を見るべし京師當時の職任に別集に詳あり

○

一社友新局を開き日々新聞と號し第一號より引續き出板ニ珍説定めて多かるべし